

冬弦の留守の間、瑠璃若は、それとなく文殊丸を観察していた。

たしかに元気がない。いずれ来る冬弦との別れを嘆いているのかと思っていたが、それだけではないようだった。好きな庭の木の手入れもせず、稚児部屋に閉じこもっている。どうやら、人目を避けているらしい。誰かが部屋を訪れると、びくりと身を震わせる。

瑠璃若が、部屋を出ようとすると、行かずにそばにいてほしいと懇願する。

「どうしたのですか？」

尋ねても、

「なんでもないのです」

と答えるばかり。だが、瑠璃若の目には、何者かに替えているように見えるのだった。

こんな時、いつもなら、ウロに相談するのだが、ウロは、雲覚に夢中になっており、冬弦が出かけてからというものの、鏡箱にすら戻ってこないで、話す機会もない。

そんなある日、瑠璃若は、はしなくも文殊丸の気鬱の原因を知ることになった。

その日、文殊丸と瑠璃若は、兄弟子の法師から琵琶の指南を受け、帰りの渡り廊下で、文殊丸と別れた。廁かわにいくためである。文殊丸は、常に瑠璃若と共にいたいようだったが、廁まで共にすることはできず、ひとりで稚児部屋に戻っていった。

瑠璃若が、用を済ませて、廊下に戻ってくると、裏庭の方から声がする。ふたり分の声で、なにか云い合っている様子だ。声のひとつは、文殊丸のもので、こっそりと庭に下りて、声のする堂宇どううの裏を覗いてみると、文殊丸と、ひとりの僧がいた。

「困ります」

「文殊丸や、なぜそんなつれないことを云う」

「あ、いけない、誰かが来たら……」

「こんなところに誰も来るものか。のう、文殊丸や……」

明らかに、文殊丸は、僧に云い寄られていた。永明えいめいという名の、三十半ばの寺官しにんであった。月のようなまん丸の後頭部で、すぐに永明とわかる。顔はといえは、つぶらな眸に、小さな鼻、小さな口が、面の真ん中に寄り集まっている人である。文殊丸は、いやがっている様子なのに、文殊丸の両手を握りしめ、顔を寄せて、潤んだ眸で文殊丸を見つめている。

文殊丸の方は、眉を寄せ、寄せられる顔から、顔を遠ざげようとしているが、背後が堂宇の壁なので、

逃げられず、右に、左に、顔を背けているのだった。その面に、幾度も永明は顔を寄せていくので、際限のない顔の追いかけてつこをしているようだ。

「これはないへん」

黙視してはおれず、瑠璃若は、一旦、少し遠くに足音を忍ばせていき、

「文殊さん、文殊さん！ どこですかー！」

あたら限りの大声を出した。

「これ、瑠璃若、稚児がそんな大声で！」

折良く、瑠璃若を叱る僧も来てくれた。しめたとばかりに、騒ぎを大きくする。

「でも、文殊さんがいなくなってしまったのです」

あーん、と泣き真似をすると、堂宇の陰から、文殊丸がホツとした顔つきで出てきた。堂宇の陰には、きつと肝を冷やした永明がいるのだろう。

「すみません、綺麗な花があつたので、つい、裏庭に下りてしまったのです」

文殊丸は嘘をついた。瑠璃若は、文殊丸に抱きついた。

「では、お部屋にもどつて、約束の手習いを見てください」

こちらは方便をつくくと、文殊丸がコクコクとうなづく。ふたりは、手を取り合つて、稚児部屋に戻つていった。

「文殊さん、あれはいったいどういうことでしょうか？」

稚児部屋に戻ると、瑠璃若はさっそく文殊丸を問いつめた。文殊丸は、頭を垂れた。

「見てしまったのですね……」

「見ましたとも、文殊さんは、永明さんに熱心に云い寄られておりました。今日が初めて、という感じではありませんでした」

文殊丸は、ぐったりと疲憊した様子で、やりきれなさの滲んだ溜息をついた。

「そうなのです、十日ほど前から、文を送つてくるようになり、そのうちに呼び出されて、あのよう……」

「文殊さんは、永明さんがお好きなのですか？」

文殊丸は、これにははつきりと首を振る。

「私がお慕い申し上げているのは、冬弦様ただおひとりです。瑠璃若もそれはわかっているでしょう？」

「なら、なんできつぱりと、永明さんにお断りを入れなさいのですか」

文殊丸は、心外だというように、少しばかり声を強めた。

「何度も申しました。けれど、どれだけ申ししても、通じないのです。あの方は、どうやら、私もあの方を想っているとお断りをしておられるようなのです」

「迷惑です、とはつきり云つてみてはどうですか？」

「『あなたの気持ちをお受けすることはできません』とは申しましたが、それでは足りないのでしょうか」

瑠璃若は、びしゃりと自分の膝を叩いた。

「私だったら、『わーん、誰かー！』と泣き声を上げて、人を呼びます」

文殊丸は、頬を染めた。自分には、その技はとも使えない、とうなだれる。

「じゃあ、私が、きつぱりとお伝えしてきてあげます」

永明のことは、ふたりとも決して嫌いではない。だが、色恋のことで悶着もんちやくが起ころのは困る。文殊丸は冬弦の稚児であるから、徒弟しでの僧が横恋慕をし、手を出すなど、もつての他な話である。瑠璃若も、そういった稚児としての立場はわきまえているので、ここはきちんとさせておかねばならないと、肚はらを据え、卒然と立ち上がるのだった。

「え、待つてください、瑠璃若……」

文殊丸が止める間もなく、瑠璃若は部屋を飛び出していった。

そして、しばらくしてから、恐ろしいものでも見た、というような顔つきで戻ってきた。

「永明さんは、なんだかお人が違ってしまったようでした」

瑠璃若は、廊下で永明をつかまえ、はつきりとした言葉で、文殊丸の気持ちを伝えたのだが、永明は「ばかな」と一笑い、そればかりでなく、文殊丸と自分の関係が知れたならしかたない、と秘密の打ち明け話をしたのである。それによると、永明と文殊丸は、熱烈な文を、毎日欠かさずこつそりと交わしあい、院内で見かければ、遠くからでもひたすら見つめ合い、月夜の晩には、裏庭の雑木林の中で、こつそりと逢い引きをしていると云うのだった。

「月の光を浴びた文殊丸の姿は、まこと天人のようで、薄く開かれた唇から漏れる息は、甘い香がし、潤んだ眸まゆでわしを見つめ、『永明様……』と切なげに名を呼ぶのだ。そのかわいらしさは、もはや言葉にできぬ。夢中でわしの首にしがみついてくる細い腕うでの意外な力に、わしも口を忘れて、何度となく深く契ちぎり合うのだ」

宙を見つめて語る永明は、醜みにく醜みにくしているように、頬を染め、陶然としていた。その様子は、普段のごく真面目な僧とは打って変わった別人のようだった。

「ええ……！　なんでそんな嘘を……」

文殊丸はふらめいた。

「嘘ですよね、文殊丸さんが、永明さんと、口づけをしたり、身体のまさぐりっこをしたりするとは、とても思えません」

「何条もつて、この私が、あの方とそのような真似をいたしましたようか」

「一夜、二夜の話ではないとも申しておりました」

文殊丸は、板の間に突つ伏した。

「な、なんで……！　私はあの方に、これっぽっちも秋波あきなみを送った覚えはありません。そんな話が、人の耳目じぶみに触れたら、冬弦様に、貞節ていせつを疑われてしまいます。瑠璃若や、どうかこのことは、秘密にしてください」

それで、誰にも云えずに、文殊丸はひとりで暗鬱あんうつを溜め込んでいたのだった。冬弦に知れても、冬弦は文殊丸の貞節を疑いはしなないと思うが、恋する者は臆病である。瑠璃若は、コクンとうなずき、文殊丸を安堵させた。

「では、ふたりでどうすればいいのか、考えましょう」

五歳年下の稚児に慰められ、文殊丸は、涙を袂で拭いた。

「でもどうすればいいのか……」

「私にいい考えがあります。文殊さんが、永明さんに嫌われればいいのです」

「おお、まさに……。でも、どうやって？」